

リーウィウスのイデオロギーと
AB URBE CONDITA の第 I 巻の特異性

西田 卓生

序

Periochae などから判るように、リーウィウスは、(Historia) AB URBE CONDITA を 142 巻著したが、周知の通りその約 4 分の 3 が散逸し、僅かに 4 分の 1 弱が現存するのみである。特に後半部がすべて失なわれている現状では、グラックス兄弟の農地法や、マリウスとスッラ、そしてカエサルとポンペイウスの戦いに始まり、アクティウムの海戦まで続く長いローマの内乱、そしてアウグストゥスの治世をリーウィウスがどのように描いたか、といった興味ある問題の研究は、極度に困難である。もし後半部が現存していれば、内乱期やアウグストゥス帝の時代の描き方から、リーウィウスがこれらの史実に対しどのような態度を以って臨んだかといった点、更にリーウィウス本人の政治的イデオロギーや、アウグストゥス帝との個人的関係などが明らかになるであろう。

しかし逆に考えると、上記の問題などを考察する上で、第 1 Pentade、そしてその中でも後に論じる特殊性から、第 I 巻がほぼ完全な形で現在まで伝わっているという事実は、非常に意義深いと考えられる。何故ならば、AB URBE CONDITA にリーウィウスが着手した時期、即ち第 I 巻を書き始めた年代は、学者達によりその説は多少異なるが、アクティウムの海戦後それほど時を経ておらず、ローマ市民達にもリーウィウス自身にもローマの悲惨な内乱期の記憶がまだ生々しく残っており、カエサルの後継者として最後の勝利者となったオクタウィアヌスが、引き続き軍事及び民事にわたりどのような政策を実施するのか未だ不明確な時期だったからである。この期待と不

安の入り混ざった時代に、リーウィウスは第Ⅰ巻の執筆を開始した。そしてリーウィウスは、AB URBE CONDITA を著すという大事業に約40年を費やしたと考えられ⁽¹⁾、執筆に着手したばかりの頃と完成時とでは、社会情勢や時代精神などの点でかなりの隔りが有った。当然考えられることは、第Ⅰ巻第1 Pentade をリーウィウスが書いた時は、著作のもっと後の部分を書いている時より、ローマ社会や時代を見るリーウィウスの目は厳しく、政治的イデオロギーはまだ生々しく角の立ったものであつただろう。そして第Ⅰ巻の内容は、ローマ太古の伝説と7人のローマ王の治世である。するとリーウィウスが生きた内乱期及びアウグストゥス帝の時代が、第Ⅰ巻とは年代や内容の点で大きくかけ離れていても、第Ⅰ巻の中にリーウィウスと同時代の事件への暗示や仄めかしが書き込まれているかどうか、又リーウィウス自身の思想やイデオロギーが反映しているか否か、更に第Ⅰ巻は現存する他の諸巻と比べてどのような特徴を有するか、といった問題点が浮び上がって来る。

私自身の考え方を述べれば、第Ⅰ巻にリーウィウスのイデオロギーや同時代への暗示が有る筈なのであり、無い方が不自然である。何となれば、アウグストゥス帝の時代の代表的な詩人達、ウェルギリウス、ホラーティウス、オウィディウス等の詩を想起して類推すればよい。彼等詩人達は、そうすることが当然であるかのように内乱期やアウグストゥス帝の時代を、明に暗に歌っている。リーウィウスも、当時の代表的な歴史叙述家として、自分の壮大な偉業の第一步に位置する第Ⅰ巻執筆中には、既に述べたように内乱期の生々しい記憶や思いが脳裏をかすめ、又同時進行していたアウグストゥス帝の政策に対して賛否の入り混ざった感情が、彼を襲ったこともあつただろう。

拙論では、上記のような点を念頭に置き、H. Petersen⁽²⁾やR. Syme⁽³⁾等の興味深い論文や著書を参考にしつつ、第Ⅰ巻に見出せる、同時代への暗示や仄めかしなどを通して、リーウィウスのイデオロギーと第Ⅰ巻の特異性との関連性を明らかにしたい。その際、当時の代表的な詩人達の詩句やタキトゥスの著作などを援用する。又多少抵抗はあろうが、リーウィウスの主義思想を述べる時、敢えて「イデオロギー」という言葉を使用した。

1 章

第 I 巻の執筆開始

第 I 巻と その時代背景 を考察するに当たり、リーウィウス が AB URBE CONDITA の執筆に着手した年代と、彼が第 I 巻、そして第 1 Pentade を公にしていた順序を議論する必要がある。既にこの問題については多くの学者が検討を行なっており、決定的で且つ厳密な結論はまだ出されていないが、大まかな年代は確定されている。

まずリーウィウスがいつ執筆を開始したかという問題を解決する為に度々言及される箇所は、ヤーヌス神殿の扉について記した I 巻 19 章 3 である。ヤーヌス神殿の扉は、戦時には開かれ、平和時には閉ざされた。この扉につきリーウィウスは次のように書いている。

I 巻 19 章 3 節：それから、ヌマの治世後に扉は 2 度閉められたが、1 度目は第 1 次ポエニ戦争終結後でティトゥス・マンリウスが執政官の年であり、2 度目に扉が閉められたのは、我々がまのあたりにしているように神々が我等の時代に与え給うたのであるが⁽⁴⁾、アクティウムの海戦後に最高指揮官カエサル＝アウグストゥスが海陸両面にわたり平和をもたらした時のことである。

しかしリーウィウスは、26～25 BC に遂行されたヒスパニア平定戦争後再度扉が閉じられたことに言及していない。アクティウムの海戦は 31 BC であるから、上記の一節は 31～25 BC に書かれたことになるが、更にリーウィウスがオクターウィアヌスを“アウグストゥス”という称号で呼んでいる点に着目すれば、元老院がこの尊称を贈ったのが 27 BC であるから、執筆開始時は更に限定されて、27～25 BC となる。

よく行なわれる基本的な議論は以上のようなものであるが、執筆年代に関

する問題は、実はこれで結論が出たとして済まされるほど簡単ではない。実際の著作活動の他、特に準備期間や後年の加筆などへの配慮も大いに必要なのである。事実 27～25 BC の間にリーウィウスが AB URBE CONDITA に着手したと考えている学者は殆どいない。だが、ここではまず 27 BC が、リーウィウスを考察する際鍵となる重要な年であることを強調しておきたい。

さて執筆年代について、Praefatio から幾つかの推論が展開できる。Syme は、断定的な調子ではないが、この Praefatio は、27 BC 頃書かれたと述べている⁽⁵⁾。既に述べたように、この年にはオクターウィアヌスは、“アウグストゥス”の尊称を得たが、このことは、彼がローマ国民のみならず元老院からも指導者として信任を得たことを意味し、その背景には、アクティウムの海戦から4年を経て安定し始めたローマ社会が有ったと思われる。しかしリーウィウスの Praefatio は、ペシミズムの色彩が濃い。これを根拠として、Bayet は、第I巻のみならず第1 Pentade の成立を、更に遡って31～29 BC と考えている⁽⁶⁾。又 Bayet の説に依れば、リーウィウスは、まず第I巻を書き終えて、恐らくそれを単独に出版した。次にII巻～V巻が書かれた。この説は、第II巻の1章1～6が、新たな序文の機能を果している点に着目すれば納得できる。従って少なくとも出版順序からみても、まず第I巻の特殊性が見出せるのである。次に序文の機能を備えた文が現れるのは、第VI巻の冒頭部である。更に、最初の10巻は27 BC までには完成していない、という Laistner の説⁽⁷⁾を加味すれば、リーウィウスの Praefatio は、第2回目出版された第1 Pentade への序文ということになり、AB URBE CONDITA 全体への序文では有り得ない。確かに Praefatio の中で、リーウィウスは、ローマ史を通して書くことを公言しているが、もし、自分が着手した事業全体を見通して Praefatio を書いたとすれば、XXXI 巻の冒頭部の序文で、それが想像を上まわる大仕事であることを悟ってリーウィウス自身戸惑ったりするだろうか⁽⁸⁾。

纏めると、リーウィウスはまず第I巻を書いて出版し、次にII～V巻を書き、それを第I巻と共に Praefatio を付けて出版した。次に Praefatio が

27 BC に書かれたという Syme の説を採用すれば、第 I ～ V 巻は、27 BC 以前に書かれたことになる。しかしこの年代は、先に引用したヤーヌス神殿の扉に関する一節でリーウィウスが、オクターウィアーヌスを“アウグストゥス”と呼んでいることに抵触する。私の考えでは、この部分は、恐らく後の加筆であろう。第 I 巻は27 BC 以前に公にされたのであり、その時には、オクターウィアーヌスに“アウグストゥス”という尊称は、当然のことながら書かれていなかった。だが加筆を行なう最も良いタイミングは、2度目の出版時、即ち Praefatio と共に I ～ V 巻が出版された時だと考える。かくして、先の議論で現われた年代 27 ～ 25 BC は、Praefatio と第 1 Pentade の執筆年代ではなく出版年代であろう⁽⁹⁾。27 ～ 25 BC に第 1 Pentade が出版されたのであり、もし 25 BC 以後に出版されたとすれば、リーウィウスはヤーヌス神殿の扉が、ヌマ＝ポンピリウス王以後3度閉じられたと訂正した筈である。又執筆着手年代に関する Bayet の 31 ～ 29 BC は、出版年代や Praefatio の書かれた時期に鑑みて多少早すぎるようである。私は、28 BC 頃と考える。

以上の議論を、私は一つの仮説に基づいて行なった。それは、Praefatio が27 BC に書かれたとする Syme の説が正しい、という仮説である。確かに Syme の説が正しいと仮定すると、その仮説から色々と納得できる結論が引き出せるのであるが、Syme の主張を立証する為には更に検討が必要であるかもしれない。

さて Praefatio が、27 BC に書かれたとすれば、アクティウム海戦後4年経て未だ濃いリーウィウスのペシミズムは、一体何に起因するのかという疑問が生ずる。まず、ローマの内乱という悲劇が、いかに強く深くリーウィウスの心中に影を落としていたかを示していると解釈できる。同じローマ人同士殺し合った内乱の痛々しい記憶は、すぐには消えなかったのであろう。だが一方でウェルギリウスは、アクティウムの海戦前に早くも『ゲオールギカ』の作詩に着手し、完成した4編の詩は、29 BC にオクターウィアーヌスのアテッラの別荘で朗読されたと伝えられ、その一連の詩の中でも第4歌

では、蜜蜂の王国に喩えながら、オクターウィアーススにより実現されるべき将来のローマの理想像を歌っている。リーウィウスの Praefatio とウェルギリウスの『ゲオールギカ』の発表年代を比較すると、単純に考えれば、時が経た分だけリーウィウスの Praefatio は、もつと楽観的雰囲気を含んでいても不思議はないと思われる。すると Praefatio のペシミズムは、単にリーウィウスの心中で内乱期の苦々しい記憶が尾を引いているのみならず、更に別の原因が想定され得る。それは、アウグストゥスの単独支配やその政策に対するリーウィウスの政治イデオロギー的警戒、或は反発ではなかったかと私は考える。そしてそれらは、次の章で示すように、暗示や仄めかしなどの形態を取って、第Ⅰ巻の中に現れたと考えられる。それらがどのようなものであったか、一例として Praefatio の次の文を考えてみる。

序文、9節：我々の身についた悪徳にも、またそれを矯正することにも耐えることができないこの時代に到達するまで、...

Syme が主張するように、この文が 27 BC に書かれたとすると、その前年（28 BC）に、内乱で混乱疲弊したローマ社会の再興策の一環とすべくオクターウィアーススが提出した婚姻に関する法案につき、今更そのような手段を講じても無駄であるとリーウィウスは言いたげである。“矯正、救済”（remedium）という言葉が、中心的概念を含んでいる。事実この法案は廃案となり、このことをプロペルティウスは次のように歌う。

Ⅱ、7、1：キューンティアよ、たしかに君は、法案が葬り去られたことを喜んでいたね。

プロペルティウスでさえ、オクターウィアーススを暗に皮肉っていたのである。

さて既に述べたように、Syme や Bayet の研究と考察から第Ⅰ巻は、第1

Pentade の残りの4巻と Praefatio が書かれる以前に 単独に出版されたという結論が導かれるが、更にそこから第I巻の特異性を引き出すことができる。

第I巻の特異性は、大きく分けて文体と構成の中に見出せる。但し拙論では、文体に対する考察は行なわない。イデオロギーと結びついた第I巻の特異性は、内部構造と深く関連しているからである。それは、とりもなおさず第1 Pentade の中での第I巻の独自性である。

ローマの伝説時代は別として、第I巻で記述された王政期は約250年続いており、第II～V巻では、共和政期約120年間の事蹟が取り扱われている。従って記述の長さや年代の範囲との比較により、リーウィウスがいかに王政期を圧縮して描いたかが理解できる。確かに資料不足のため圧縮せざるをえなかった面もある。また第II～V巻が年代記に近い形式を持っているのに対して、第I巻が全く年代記形式を採用していないという事実は、リーウィウスが第I巻に於いて題材に対して特別な取り扱い方をしているということであり、更にそれらを自分のイデオロギーと絡ませることによって、第I巻をそれ自体で一つの完結した作品に仕上げているのである。一般的には概ね Pentade や Decade 毎に完結性を持たせた叙述をリーウィウスは行ない、その中では 文体や題材の取り扱い方に統一性を保たせているが、第1 Pentade に関して言えば、2つのグループから成り立たせて、結局第I巻で用いた文体や、そこで取り扱ったような種類の題材は、続く諸巻でもはや（或は当分の間）現れないと、リーウィウスは考えていたことを意味する。そして第I巻を年代記形式から解放させた代わりに、リーウィウスはそこに自分のイデオロギーを強く反映させたのであり、また逆に考えれば、第I巻の題材は、イデオロギーを反映させ易いものでもあった。常識的な政治的感覚を持っていれば、単独者支配という点で王政は共和政と鋭く対立する一方で、帝政と相通じていることに気付くのは容易である。そしてイデオロギーの反映は、表面的には暗示や仄めかしといった現象形態を取るようになったのである。

さてこれらの点を検討する為に、次章ではイデオロギーと連繋した第Ⅰ巻に見出せるリーウィウスと同時代への暗示を具体的に述べた上で、3章で上記の点を更に詳細に検討し裏づけをする。

2 章

暗示とイデオロギー

具体的に第Ⅰ巻の内容と、リーウィウスと同時代の出来事との類似点に目を向けてみる。但し初めに断っておくが、以下の暗示例を検討し考える場合、決して現代人の我々が、リーウィウスの文章を読んでどう感じるかではなく、飽くまでリーウィウスと同時代のローマ人達が、どのような感じを抱くか、という点に注意を集中すべきである。

29 BCにオクタウィアヌスは、元老院議員のうち約190人を排除して元老院の規模を縮小させ、27 BCには20人弱の元老院議員を選抜して自分の顧問としたが、公的業務を処理する際、度々案件を元老院へ諮らず、個人的に案件の裁決に当たることを好んだ(Dio, 52, 42, 1~3)。更に皇帝は、元老院への諮問や批准を経ずに、宣戦布告や和平条約の締結を行なう権力をしばしば行使したようである(Dio, 53, 26, 6)。このような Dio Cassius の記述を念頭に置くと、リーウィウスの第Ⅰ巻の、タルクィニウスニスペルブス王に関する次の一節は興味深い。この王こそ、他にも優れたローマ王達が居たにも拘らず、後世のローマ人達に王政に対する根絶し難い憎しみを植えつけた人物である⁽¹⁰⁾。

I 巻49章6~7：かようにして特に長老達(Patres)の人員が減少したが、外ならぬ小人数であることで長老階級が尊敬を一層享受できぬようにするために、そして何事も長老達の議論を経て取り行なわれずともそれほど彼等が憤慨することなきように、タルクィニウスは何人も新たに長老に選抜しないとの決断を下した。事実この人物こそ、すべての案件につき

長老達に諮問するという、先代の諸王から受け継がれて来た慣例を破った最初の王であった。タルクィニウスは、自分の一族腹心と協議を行なつて国政を司どつた。戦争、和平、条約、盟約を、国民や長老の命なきまま、王自らの裁量で自分の好む相手の国や部族と、或は締結し、或は破棄したのである。

また上記の記述の直前（I, 49, 4～5）では、長老達の数が増減した理由として、タルクィニウス王が訴訟の審理権を一手に握り、自分の好みに従つて長老達に処刑、追放、財産没収の刑を科した為であると、リーウィウスは書いている。

Dio Cassius によるアウグストゥス帝と、リーウィウスによるタルクィニウス＝スペルブス王の描写の類似性は明白である。しかも Dio Cassius は、リーウィウスより後代のローマ史家であるから、リーウィウスが Dio Cassius の記述を模倣したことはあり得ない。またたとえリーウィウスが、タルクィニウス王について語った前時代の著作をソースとして利用したとしても、ここではそれはあまり重要な問題ではない。むしろ特に留意すべき点は、Dio Cassius が記述したアウグストゥス帝の政策は、リーウィウスが第 I 巻を著している頃と時をほぼ同じくしたものであるということである。この事実によって、リーウィウスが、悪名高いタルクィニウス＝スペルブス王の描写を通じて、アウグストゥス帝の政策を暗示し揶揄している高い可能性が考えられる訳である。恐らくこの一節を読んだ当時の読者は、アウグストゥス帝の政策を連想したのであろう。

リーウィウスが、ローマ史に於ける悪役の一人であるこのタルクィニウス王を通して、アウグストゥス帝への暗示を行なつたと仮定すると、リーウィウスが、心の底でアウグストゥス帝に警戒の念を抱いていたと考えても、特に不自然という訳ではない。よく知られているように、リーウィウスはポンペイウス支持者であつたし⁽¹¹⁾、このことは、延いてはリーウィウスが共和政支持者であることも意味しており、共和政を装いつつ実質的に単独支配を

施行しているアウグストゥス帝が共和政の牙城である元老院を弱体化させる政策を遂行してゆくのを、リーウィウスは苦々しい気持ちで見っていたと考えられる。

アウグストゥス帝と同時代に生きたため、リーウィウスは、このカエサルの後継者を名指しで、直接批判することは避けた。そして暗示、仄めかしといった手法に訴えたが、後代五賢帝の一人トラヤヌス帝の時代を中心に執筆活動に従事したタキトゥスに至っては、代表作“Annales”の中で、はっきりとアウグストゥス帝批判を 実に要領よく纏めている。“Annales”の第I巻の9節と10節でアウグストゥス帝の政策に対する賛否の意見が、対を為して述べられているが、賛同の意見の長さが、否定的な意見の長さの半分という事実も皮肉である。これらの意見が、タキトゥスが述べているように、“sine ira et studio”⁽¹²⁾という態度で書かれたとすれば、当時のローマでも賛同より批判の声の方が大きかったようである。トラヤヌス帝、ハドリアヌス帝といった寛容で優れた皇帝の時代に、タキトゥスの読者達は、ユーリウス＝クラウディウス家の皇帝達と共に、フラウィウス家出身で恐怖政治を行なったドミティアヌス帝の暴虐な政治への暗示を、タキトゥスの作品の中に感じ取ったであろう。

タキトゥスが記述したような、まず兵士を贈物で、民衆を安い穀物で、元老院議員を賄賂と官職で籠絡して単独支配者が自分の勢力を固める、といった共和政支持者に共通した帝政への批難を考慮すると、リーウィウスが書いた次のエピソードは、考えさせられる所が多い。これもタルクィニウス＝スペルブス王に纏わるものだが、この王が、ガビイー人を征服する為に自分の息子の一人をその部族へ送り込み、その息子はガビイー人の中で自分の勢力拡大に努める。自分が指導的地位に就くと、ガビイー人達の有力者や指導者に対して次々と処刑や追放の刑を科して内部崩壊を生じさせ、最終的にタルクィニウス王は、ガビイー人達をローマの支配下に置くことに成功する。リーウィウスはまず、タルクィニウス王が、「最もローマらしくないやり方、即ち欺瞞と奸智」(I, 53, 4)を用いたと記した後、ガビイー人の最期を次の

ように描写している。

I 卷 5 4 章 1 0 : 次には押収品の大盤振舞が行なわれた、かくして私的な利得という甘みに惹きつけられて公的な不正を思う心は失なわれ、遂には部族を統率する者も援助の手を差し延べる者もいないまま、ガビイー人達の国は、一戦も交えることなくローマ王の手中に落ちた。

(Largitiones inde praedaeque; et dulcedine privati commodi sensus malorum publicorum adimi, donec orba consilio auxilioque Gabinares regi Romano sine ulla dimicatione in manum traditur.)

ここでアウグストゥスが、軍事、民事、宗教などのあらゆる権限を手中に収めてゆくタキトゥスの描写と比較対照すると面白い。

Ann., I 卷 2 章 : アウグストゥスは、報賞金を与えて兵士を、安価な穀物を配給して民衆を、そして平和の心地よさですべての人々を籠絡してしまおうと、徐々に勢力を増し、元老院、政務官、そして法の権能一切を自分の手中に収めた。

(ubi militem donis, populum annona, cunctos dulcedine otii pellexit, insurgere paulatim, munia senatus magistratuum legum in se trahere,...)

本来リーウィウスとタキトゥスは、文体に於いて対照を為すと考えられているが、上記の二つの文章は、描写の流れや文章心理の点でかなり類似している。また割愛したが、上記引用したリーウィウスの文章の直前の箇所でも、タキトゥスがよく行なう文章展開や描写パターンが見出せる。トラヤヌス帝やハドリアヌス帝の時代の最高の知識人として当然リーウィウスを読んだタキトゥスは、上記のような文章中に帝政批判の暗示を感じ取って、自分の著作に書き込み、結果的に文体や文章心理の流れまでも類似した描写を行

なうに至ったとも理解され得る。このような文章は、リーウィウスやタキトゥスの作品中を探せば、更に多く見出せるだろう。

以上少なくとも引用した文章を見る限り、リーウィウスは、第I巻執筆中にはまだアウグストゥスへの警戒の念を完全には捨て切っておらず、作品中でそれを暗示している可能性は大きいということを示した。

さて次にリーウィウスの気持ちが微妙に揺れ動いていると考えられる記述について触れる。オクターウィアヌスは、出来れば死後ではなく生前に何らかの称号を得ることを欲していたが、その一例として彼が“ロームルス”という称号を望んでいたようである(Dio. 53, 16, 7)。しかし新しい“ロームルス”をも包含する“アウグストゥス”という称号が、このカエサルの後継者にいかに適していたか、Taylor 達が指摘している⁽¹³⁾。そのロームルス王本人の最期と神格化について、リーウィウスは興味深い記述を行なっている。それはある種の二律背反的要素を含んでいる。もしリーウィウスが、アウグストゥスという人物の中にロームルスに帰属する何らかの共通した資質を認め、且つそれに絶対的賛美を贈ったとすれば、次のような一節をロームルス最期の場面の描写の中に書き込む筈がないと私は考える。

I 巻 16 章 4：ロームルス王は長老達の手で八つ裂きにされたのだと、秘かに言い張るような人々が当時にもいたと私は信じている。

良識を持ち、節度を弁えたリーウィウスが、ロームルス王は長老達の手で切り刻まれて殺されたと証言する人々が、当時既にいたことを自分は信ずると述べることは、即ちリーウィウス自身、自分はロームルスが長老達に殺されたことを信ずる、ということの婉曲表現にすぎないと考えられる。「私は信ずる」‘credo’と1人称で言い切っている点に留意すべきである。確かにこの‘credo’という言葉が、どの程度強い響きを持つものか問題ではあるが、少なくともリーウィウスの積極的な記述態度を示すものと考えられる。もし消極的であれば、代わりに‘traditur’，‘dicitur’，‘fertur’と

いった言葉が使用されたであろう。そして周知の通り、これと同じ事件が、ユーリウス＝カエサルに起こったのであり、更にカエサルも死後神格化された。因みにアウグストゥスも、共和政の牙城である元老院へ登院する際、必ず胸あてを身につけていた(Dio, 54, 12, 13)。

ところがリーウィウスは、ロームルスが長老達に殺されたことを仄めかした直後に、ロームルスの神格化について語り、ユーリウス＝プロクルスなる人物がその噂を広める役割を演ずる。この人物が語った内容は、ロームルスが天上へ昇って神になったということの他に、ロームルスの言葉として、ローマの未来とその使命を高らかに歌い上げるものである。その一部を引用する。

I 卷 16 章 7：ロームルス曰く「行け、そしてローマ人達に告げよ。天なる神々は、我がローマが世界の頭になることを望んでおられると。だからこそローマ人達は、軍事を修めよ、そしていかなる人間の力といえどもローマ軍には抵抗できぬことを自らも悟り、後世の者達にも伝えよ。」

リーウィウスが記したロームルスの無残な死とその神格化は、学者によりどちらか一方を強調する形で受け取られているようである。普通に考えて、そもそも神となるような人物が、高々長老達に殺される筈がなく、生前にも神聖にして犯すべからざる存在というのが一般的である。Ogilvie 達の指摘に依れば、古来ロームルスの人物像については議論が多く、異なった描写が色々と為されて来たのである⁽¹⁴⁾。リーウィウス自身、ロームルスの最後の場面を書くに当たり、当然前時代の幾つかの記述をソースとして参照し、ロームルス像の持つ多くの側面に当惑したかもしれない。しかし上記のようにリーウィウスが、結果的に二律背反とも見える記述を行なった理由として、リーウィウスに心的動揺が有ったか、何らかの思いがリーウィウスの脳裏を掠めたためとも考えられるが、私は、そのような漠然とした動機ではなく、先に述べたように、リーウィウスは、ロームルスのこの2つの面をもっと意

図的且つ積極的に記したと考える。その両面を統一的に解釈する為に幾つかの仮説を立てることができる。

まずその一つとして、ユーリウス＝カエサルの暗殺という厳然たる事実と、Praefatio でリーウィウスが述べたように、ローマの崇高さ、過去の偉業を書き通すことによって、‘remedium’もままならぬ現状に対する慰めとする、という感情が重なり合った結果と考えられよう。即ちリーウィウスは、一方では読者に ユーリウス＝カエサルの暗殺を連想させるべく ‘credo’ という表現を使いながら、ローマの崇高さ、偉大さを、初代ローマ王にしてローマの建国者たる ロームルスの人物像の中に認め、それを表明したのであらう⁽¹⁵⁾。宗教的視点からすれば、Stübler のように飽くまでリーウィウスの宗教心を強調する立場もあるが⁽¹⁶⁾、Liebeschuetz の見解のように⁽¹⁷⁾、ロームルスの最期と神格化は、リーウィウスの持つ合理性と宗教擁護が結びついている、と解釈できる。即ちロームルスの死について、リーウィウスは超自然的事実を援用せず、合理主義的説明を支持している。しかしユーリウス＝プロクリスに語らせたロームルスの神格化とそのメッセージは、ローマ国家や公共へ恩恵をもたらすものとして、その価値をリーウィウスは認め、ユーリウス＝プロクリスに語らせる形でその中に含まれる宗教心を擁護しようとしたのであらう。

また政治イデオロギーという点から考えると、単独支配を目論む者は、元老院議員によりカエサルのように殺される、或は似たような末路を歩むことになる、リーウィウスは一種の警告を発している。更に拡大解釈すると、ロームルスの最期の記述で「私は信ずる(credo)」と述べたことは、とりもなおさずリーウィウスが、自分は共和主義者であると公言しているのだとも考えられる。

以上総合して纏めた私の考え方は、以下の通りである。

まずリーウィウスは、ロームルスの死と神格化の両面を意図的且つ積極的に書いた。そしてロームルスの死はリーウィウスの政治イデオロギーから、ロームルスの神格化は宗教擁護という点から解釈すべきである。

リーウィウスは、ロームルスの最期を、第2のロームルスたるアウグストゥス及びカエサル暗殺と神格化に結びつけていると同時に、アウグストゥスへの私的感情や政治イデオロギーと、公共心とを微妙に入り組ませた形で記述を行ない、結果的には外見上二律背反的な要素が見え隠れすることになったのである。

さて第I巻の中のもう一つのエピソードに移る。リーウィアの父は、三頭体制下で追放され、Philippiで共和主義者と共に戦い、敗戦後自殺した。このような父を持つリーウィアは、最初の夫との間に6カ月の児を身籠りながら離婚し、父や夫の政敵であるオクターウィアヌスと結婚したことで、親族に対する pietas を汚したと見做されている。彼女は、最初の夫が政争で倒れたならば、夫と運命を共にしてこそ貞淑な妻であり女性だということになったのだろう。このように父や夫を見捨て、pietas を汚し、権力の座を志向したユーリアに似た女を第I巻の中に探せば、すぐ目に留まるのが、第6代ローマ王セルウィウス＝トゥッリウスの娘で暴虐な悪女トゥッリアである。彼女は第I巻46章より登場する。このエピソードの中には、第5代ローマ王タルクィニウス＝プリスクスの息子（或いは孫）で、兄弟である2人のタルクィニウスと、先に述べた第6代ローマ王の娘で、姉妹でもある2人のトゥッリアが登場し、兄弟及び姉妹とも片方が善良で片方が邪悪な人間であって、最初は各々2人の兄弟姉妹は、善良な者と邪悪な者とが結婚した。しかし似た者同士気が合って結ばれるのが世の常という訳で、邪悪な者同士、即ち妹のトゥッリアと、ルーキウス＝タルクィニウス（後の王スペルブス）とが密通を重ね、やがて一方は自分の妻、他方が自分の夫を殺し、邪悪な2人が結婚する。それを時の王セルウィウス＝トゥッリウスは黙認する。そして次は悪女トゥッリアが、夫に王の座を狙わせるべく、寝物語りに色々と法外な事柄をタルクィニウスに吹き込む(I, 47, 3～5)。最後にこのタルクィニウスは、大胆且つ公然と王のセルウィウス＝トゥッリウスを殺し、王権を奪い取る。

この悪女トゥッリアと、リーウィウスと同時代のローマの最高権力者の妻リーウィアとの間にどの程度類似性を感じ取るかは、読者各々の主観性に依存する面もある。しかし両者とも親族に対する pietas を汚した点では同様であって、まず我々とは異なり、アウグストゥス帝の時代の読者が、このトゥッリアから即座にリーウィアを連想したことは自然であるし、恐らくリーウィア本人もこのトゥッリアの箇所を読んだとしたら、かなり機嫌を損ねたことは充分に考えられる。

I 卷 59 章 13：この騒ぎの中をトゥッリアは王宮から逃亡したが、行く先々で男達女達が呪いの言葉を浴びせ、親殺しに対する激しい復讐心を呼び起こしていた。

この文は、タルクィニウスニスペルブスが王座を追われ、トゥッリア自身も親族殺害に対して呪いの言葉を浴せられながら逃げてゆく場面の描写である。あたかも将来リーウィアに起こるかもしれない事件であるかのように描かれている。

先にリーウィウスとタキトゥスが、文章心理の流れという点で似かよった描写を行なっている箇所を指摘したが、ここでもトゥッリアのエピソードを読むと、タキトゥスの悪女を感じさせてくれる。タキトゥスの著作にも多くの悪女が登場するが、例えば皇帝ネローをけしかけて母親のアグリッピナ殺害を決心させた、権力欲の塊のポッパエアなどは⁽¹⁸⁾、トゥッリアと行動様式が極めて似ていると思われる。このように考えてゆくと、ローマ歴史文学に登場する悪女達に関する研究も面白いかも知れない。

このエピソードから考えられることは、リーウィウスは、リーウィアやアウグストゥスに対して政治イデオロギー的な反発ほどではなくても、少なくとも胡散臭い感じは抱いていたと考えられる。このエピソードの記述も充分に意図的且つ積極的なものである。

さてリーウィウスは、以上取り上げたもの以外にも、第 I 卷のみならず第

1 Pentade 全体でも比較的多くの同時代への暗示、仄めかし、当て擦りなどを行なっているが、それにも拘らず支配者から何の処分も受けることなく AB URBE CONDITA を執筆し続けている。もしリーウィウスが、かなり明確な意図を以って自分と同時代への暗示、仄めかし等を含んだ文章を第 I 巻で書いたとすれば、ローマ王政期という遙かに隔たった時代内容に助けられたせいもあるが、リーウィウスと同時代の事件に関して特にきわどく微妙な箇所では決して具体的な人名や出来事をはっきりと記していない点を考慮すると、リーウィウスは実に巧みに自分の目的を成し遂げていると考えられる。而も既に述べたように、当時の注意深い読者や、時代の状況に関心を抱いている読者ならば、リーウィウスの意図している事柄を理解した上で、もしアウグストゥスが、これらローマ史初期の王達と似た政策を遂行すれば、第 I 巻に記された同じ反応が挑ね返って来るか、もしくは同じ結果に終わる可能性があると考えていただろう。

H. Petersen は、リーウィウスが自分と同時代の事件を意図的に暗示したり仄めかしたりしていると主張し、その根拠を大きく 3 つに纏めている⁽¹⁹⁾。これまでの議論と重複する点もあるが、以下にそれを記す。

(1) リーウィウスと同時代の事件の内容が、第 I 巻に記された内容と殆ど同様である。

(2) これらの事件は、執筆者の側に立って見ると、単に偶然に書かれたとは見做し難く、読者の側に立って見ると、ゆき過ぎた解釈をするに至るほど露骨ではない。

(3) これらの文章内容は、当り障りのない手法を用いて記述され、暗示などの対象を決して具体的に述べていない、慎重な態度が窺える。

特に上記の (2) と (3) の要件は、共和政から帝政への移行期という、何かにつけて微妙な時代にあつて暗示や当て擦りを行なう場合、充分肝に銘じなければならないものであろう。

かくしてウェルギリウスやホラーティウスも内乱期や同時代への暗示ばかりでなく、明示さえも恙無く行なつたが、但しオウィディウスの場合、結果

から判断して、この点で失敗したと言えよう。

以上リーウィウスの第Ⅰ巻に認められる、同時代の事件への暗示、仄めかしなどを、リーウィウスのイデオロギーや当時の社会状況などの観点から考察した。とりあえず三、四の具体例を選んだが、第Ⅰ巻中には、この章では取り上げなかった重要なエピソードが他にも幾つか有ることを述べてこの章を終える。

3 章

第Ⅰ巻の構成とイデオロギー

勿論今まで取り上げたような暗示や当て擦りは、第Ⅰ巻だけでなく、第1 Pentade でも随所に見出せる。その一例として第Ⅴ巻の後半部では、イタリア北部から侵入したガリア人達によりローマはアッリアの戦いで敗北を喫し、ガリア人達の進軍があまりに速かった為に、軍を再編成する間もなくガリア人の手に落ちるといふ、ローマの危機と屈辱、そしてその後カミッルス指導の下でのガリア人の排除とローマの再建が語られている。この時ローマは既にウェイイー人を征服しており、ローマ民衆からローマの都市機能をウェイイー人の地へ移そうとの声上がる。そしてこの動きに反論し且つこの一連の事件を振り返りつつ将来のローマを展望するカミッルスの壮大な弁論で、第1 Pentade は終わる⁽²⁰⁾。リーウィウスは、カミッルスの言葉を通じて、文字通り都ローマを見捨ててはならぬとの主張をしているのであるが、事実リーウィウスと同時代に、ローマの主都機能が外地へ移されそうになった事態が生じたのである。それは有名なクレオパトラを巡り、カエサル、次にアントーニウスが彼女の魅力に取り憑かれ、危く都がローマからエジプトのアレクサンドリアへ移りそうになった事件である。カミッルスの弁論は、この事件へのリーウィウスの強い反応であると考えられる。

では、第Ⅰ巻の中の暗示や仄めかしが何故問題になるかと言えば、それらが、第Ⅰ巻の持つ幾つかの特殊性と結びついているからである。その特殊性

は、第Ⅰ巻の内部構成と、スタイルとに大きく分けられる。更に内部構成の特性は、第Ⅰ巻で取り扱われている題材が源泉となっている。

まずリーウィウスの著作に於ける題材の取り扱い方、処理の方法の一般的な特徴を述べる。その為に、幾つかの点でローマの歴史文学の先駆的役割を果たし、現在多くが失なわれたヘレニズム期の歴史文学と比較すると、リーウィウスのみならず、ローマの歴史文学の特徴の輪郭がはつきりする。但しヘレニズム期歴史文学と言っても、極めて多種多彩であり、またその期間内にも変化を遂げている。その中でもヘレニズム期を代表する歴史家ポリュビオスは、一方で、リーウィウスが AB URBE CONDITA のソースとして利用しているが、題材の取り扱い方はリーウィウスと対照を為す。ポリュビオス等の関心事は、過去の個々の事件を因果関係を以って捉え、可能な限り詳細に叙述してその因果関係の理解を読者に促すことであり、そのためにポリュビオスは頻繁に専門用語を使用している。何故なら、ポリュビオスは、自分の著書の読者層として政治や軍事に従事する人々を考え、これらの人々に役立たせるよう歴史を書いている。このような実益を目的とした歴史家達は、眼前にある様々な題材についてさほど異なった取り扱いを行わない。どの題材も似たような処理をし、事件の状況や因果関係を常に詳細に描く為、必然的に文体及び文の流れは鈍重で、繰り返しも多くなる。事実ポリュビオスのギリシア語は、堅苦しいことで有名である。但しこれがヘレニズムの歴史叙述家すべてに該当する訳ではないし、ポリュビオスの作品中でも読者の興味をそそる箇所は多く有る。しかし政体循環説のような理論的基盤の上に実利を目的とし、更に普遍性を志向して書かれた歴史作品は、自然と上記のような性質を帯びて来るだろう。

これに対してリーウィウスは、あるエピソードに焦点を当て、その前後の事件を時には大胆に削り取り、更に自分が考案した因果関係そして結末へと話題を展開してゆく題材処理の手法を多々用いている⁽²¹⁾。この点は、Burck 等が指摘している⁽²²⁾。この手法は、現存するリーウィウスの著作全体にわたって見出せる。そして題材を上記のように処理することによって、

リーウィウスは、ローマの王政期を僅か1巻だけに纏め上げた。リーウィウスの叙述内容とよく比較される、ハリカルナッソスのディオニューシオスが、王政期の記述に4巻を費していることを考えると、リーウィウスが、いかに既述の手法を巧みに且つ効率よく用いているか理解できる。

更にリーウィウスの第I巻の内容と構成を考察すると、第1 Pentade の中でも続く4巻には無いある種のいびつさを感じ取れる。このいびつさとは、第I巻の特徴であり、私の考えでは、このいびつさは、3つの事柄に起因する。

第一に、先に述べたリーウィウス独特の題材を処理する手法、

第二に、ローマ太古の伝説と、ローマの王政期という第I巻で取り扱われた内容、

第三に、拙論の第1章、第2章で考察した、リーウィウスのイデオロギー、及び同時代の事件から派生したリーウィウスの関心事と、第I巻の内容との関連である。

別の言い方をすれば、第I巻の内容やエピソードに関して、リーウィウスの記述態度や関心の度合は、全く一様ではない、ということである。

では順を追ってもう少し具体的に第I巻の内容を調べてゆくことにする。まずローマ太古の伝説時代の部分では、この時代を簡単に済ませてしまおうとするリーウィウスの記述態度が際立っている。Praefatio で自ら次のように述べている。

序文、6節：純粹な歴史上の記録よりはむしろ詩的物語の形で伝えられているこの都の建設以前、或は建設が試みられた以前に遡る輝かしい事蹟を、私は肯定も否定もするつもりはない。

この文は、リーウィウスらしい節度を以って優雅に書かれているが、要は、自分は伝説の時代に関心がないということを表明しているのである。そしてBurck が指摘している通り、ロームルス王以後の描写と比較して、この伝説

の部分では、登場人物の心理的動機づけや性格描写が為されていない。更に一例としてアエネアースの子アスカニウスの母に関する著名な論争、即ちアスカニウスの母は、トロイア時代のクレウーサかそれともアエネアースがイタリアへ漂着した後の当地のラーウィーニアかという問題、又アスカニウス自身、同名の別人が居たかどうか、それはユールスであったかという問題を第Ⅰ巻3章で取り上げているが、最終的なラーウィウスの態度は、次の文に集約される。

Ⅰ巻3章2：何となれば、一体誰がかくも古い事柄を確かなものであると断言できようか。

伝説時代についてのラーウィウスの記述態度は、極めて消極的である。

では、続く7人のローマ王の記述はどうか。単に記述の長さに目を向けると、ロームルス、トゥッルス=ホステリウス、セルウィウス=トゥッリウス、タルクィニウス=スペルブスの4人の王の治世の記述は長く、残るヌマ=ポンピリウス、アンクス、タルクィニウス=プリスクスの3人の王の記述の約2倍である。アンクス王の記述が一番短い。更に詳しく検討すると、トゥッルス=ホステリウス王の時代の叙述には、有名なホラーティウス3兄弟とクローリアーティウス兄弟との決闘のエピソードが語られている。このエピソードは、先に述べた(2章)ような、ラーウィウスと同時代への暗示、仄めかしを含んではいない。むしろこのようなエピソードは、ラーウィウスのイデオロギーとは無関係で、ラーウィウスが、道徳的或は教訓的意義を認めて語ったか、またはそういった事柄とは全く無関係にそのようなエピソードを語ること自体に喜びを感じ、その為に書き込んだとも考えられる。故に既に述べたような同時代への暗示、当て擦りといった問題に考察の対象を限定すれば、このエピソードは削除されてしかるべきであろう。するとラーウィウスは、ロームルス、セルウィウス=トゥッリウス、タルクィニウス=スペルブスの3人の王について特に詳細に語っていることになる。即ち先に指

摘したリーウィウス独特の記述の手法を用いて、特に3人の王に焦点を当てたのである。

では何故リーウィウスが、この3人の王に第I巻で特別な関心を払い、詳細に物語ったかという問題が生ずる。そしてその理由こそ、3人の王が、リーウィウスと同時代の事件や、リーウィウスが常に意識し注目していたであろうアウグストゥスの政策への暗示や当て擦り、更には警告を発する格好の材料を提供してくれたからであると考えられる。我々の感覚からすれば、第2代ローマ王ヌマ＝ポンピリウスについて、リーウィウスはもっと多くを語るべきだと思われる。しかしヌマ王は、ローマを非常に賢明に統治し、その治世は平和であった。要するに特筆すべき事件は殆どなく、従ってリーウィウスの関心を引くことはなかったのだろう。恐らくリーウィウスが、省略せず十分に語るべきだと考えたエピソードには、先に示した幾つかの事件の他に、同胞が殺し合った点で内乱とも通ずるロームルスとレムスの争い、サビーニー人の女性の強奪、アルバ＝ロンガの破壊、タルクィニウス＝スペルブスの最期などが含まれるであろう。

ここで上記の点をもう少し具体的ににする為、一つの例を取り上げる。アウグストゥス帝は、帝国領内の実情を把握する為に、何度か全国的調査を行なっている。例えば、新約聖書のルカによる福音書の第2章に依れば、丁度イエス＝キリストが生まれる頃、全帝国領民は戸籍登録をすべきとの勅令を皇帝アウグストゥスが発し、その為にヨセフがベツレヘムに帰ったと記されているが、それよりかなり以前の28BCにも、既にアウグストゥスは、同僚のM. アグリッパと共にローマ市民の財産の評価査定を行っている(Res Gestae, 8,2)。この政策と調査は、生まれた家系ではなく財産を基盤にケントゥリア組織を作り上げた第6代ローマ王のセルウィウス＝トゥッリウスに、リーウィウスの注意を向けさせたと考えられる。リーウィウスは、ロームルス王が制定した組織について語っているが(I, 8, 13, 6~8)、それに比べるとセルウィウス＝トゥッリウス王の定めた制度に関するリーウィウスの記述(I, 42, 4~43, 13)はかなり詳しい。当然推測できることは、第I巻執筆中に、

セルウィウス＝トゥッリウスとアウグストゥスの政策がリーウィウスの心中で重なり合っていたのではないかということである。

これらの例から判るように、先に指摘した第Ⅰ巻のいびつさの原因の一つは、リーウィウスの関心事が叙述の長さや詳しさを大きく左右したことであり、その関心事は、第Ⅰ巻の中で暗示や仄めかしとなって現われたのである。

では第ⅠPentadeのうち残りの4巻には、このような現象が見出せるだろうか。Burckは、有名な著作の中で、第ⅠPentadeを対象としてリーウィウスの *Erzählungskunst* を研究した。Burckは、第3巻から考察を開始している。そしてこの巻の中間部(Ⅲ, 33f.)でその叙述は最高潮に達していると述べている。第3巻は、十人委員会(Decemviri)とそれに関連した記述に終始している。まず Decemviri が設置されるに到る過程、次に Decemviri が成し遂げた成果、そして Decemviri が権力を傘にきて行う横暴な行為、その中心人物の悪役クラウディウス、犠牲となった結婚前のうら若き娘ウェルギニアの悲劇、そして Decemviri の廃止という具合に筋が展開し、その中に付随して小さな話題が鑲められている。第2巻では、前半部のメインテーマは、共和政初期の幾つかの事件や外部民族との戦いの外、プレープスのアウェンティヌスの丘への一斉退去及び護民官職の設置であり、後半部はコリオラーヌスを巡る話題が中心である。第5巻は、前半部がローマによるウェイイー人の征服、後半は、ガッリア人によるローマ強奪と、カミッルス達によるローマの復興である。このように第ⅠPentadeの第Ⅱ巻から第Ⅴ巻までは、第Ⅰ巻に比べてエピソードの規模が大きくなっている。確かに外部民族との戦いや平民と貴族との階級闘争にまつわる小さなエピソードは有っても、メインテーマは比較的明白である。しかし第Ⅰ巻は、むしろ小さなエピソードの集合体といった様相を呈している。

因みに Burck は、リーウィウスが歴史を記述する際、アリストテレスの詩学に規定された劇詩の理論を適用したことを、第ⅠPentade、特に第Ⅰ巻から多くの例を取り出して示そうとした。Burckは、リーウィウスの描写技法に、*enargeia* と *ekplexis* という概念を導入しつつ、第ⅠPentadeの様

様なエピソードにつき、初め、中間部そして終結部を持っている点を、アリストテレスの『詩学』に従って指摘している⁽²³⁾。しかし Jumeau は⁽²⁴⁾、Burck の説に疑問を投じ、第 I 巻、或はそれに続く第 1 Pentade であたかもアリストテレスの理論が適用されているかのように見えるのは、一連のエピソードが短く、完結し易いものであるからであると述べている。Burck の主張の中で *enargeia* や *ekplexis* 及び劇的描写は、リーウィウスの現存する作品の至るところに見出され、この傾向はタキトゥスにも該当する。しかしアリストテレスの詩学との関連は、歴史的事件の流れやその展開が大規模になる第 3 Decade 以降にも妥当性を有するか否かの検討が必要であろう。

私自身、リーウィウスの叙述とアリストテレスの詩学とは、さほど関係が無いと考えるが、Burck に上記のような主張をさせるほど、第 I 巻では完結性を持った短いエピソードが多数現れるのは事実である。そして第 I 巻では、第 1 Pentade の他の諸巻が各々大きなテーマを持っているのに対し、そのようなメインテーマを見つけ出すことはできない。これらは、第 I 巻の持つ題材、テーマといった点のいびつさであり、第 I 巻は、これら小さなエピソードのいびつな集合体であり、これは、先に述べたように、リーウィウスが、同時代の事件に対して持った関心事に起因する。そして、そのいびつな集合体の故に、第 I 巻は年代記形式を帯びていない。これらは、題材とアウグストゥスの時代という点から考察した私の一つの結論である。

又イデオロギーという側面から考えると、既に具体的暗示の例を示しつつ幾度か述べたが、このいびつさは、少なくとも第 I 巻執筆中のリーウィウスの政治観、即ち彼がポンペイウス支持者であったこと、延いては共和政支持者であったことに繋がる。言い換えれば、リーウィウスが共和主義者の目で同時代を見て暗示、仄めかしを行ない、その産物として AB URBE CONDITA の中の第 I 巻といういびつな作品を作り上げたのである。

私は拙論第 1 章で第 I 巻が単独に出版されたこと、そしてそれに由来する第 I 巻の独立性を指摘したが、本章で考察した第 I 巻の幾つかの特異性は、第 I 巻の独立性と不可分のものなのである。

R. Syme は、彼の名著 'The Roman Revolution' ⁽²⁵⁾ の中で、リーウィウスを歴史叙述活動に於いても、政治的にもアウグストゥスに極めて近い人物として描いているが、後の論文で自らの意見を変えて、リーウィウスを「最後の共和主義者」と呼んでいる⁽²⁶⁾。そして Syme がこのように説を変えたことを、Walsh は妥当であると考えている⁽²⁷⁾。

当時何かにつけ共和政を装うことは、一種の流行であり、又出身地のパタウィウムは共和主義者のたまり場であったが、リーウィウスの場合、以上の考察から、単なる流行に従った共和政支持者とは思えないのである。

しかし一方でリーウィウスが、アウグストゥスや彼の一族を温い目で見ていることも事実であろうし、アウグストゥスとしても、たとえリーウィウスがポンペイウス賛美者であれ、共和主義者であれ、良識と節度を持ち、決して独断には走らないこの歴史家に敬意を表していたのであろう。ウェルギリウスやホラーティウスにマエケナーヌのようなパトロンがいたのとは多少異なり、リーウィウスの場合、帝室の人々と直接親交があったようである。だからこそ、第2代皇帝ティベリウスはリーウィウスの著作を愛読し、後に第4代皇帝になるクラウディウスは、リーウィウスに励まされて歴史を書いたのである。

註

(1) M. L. W. Laistner, *The Greater Roman Historians* (Berkeley, 1947), 77.

(2) H. Petersen, 'Livy and Augustus' *TAPA*(1961), 440-452.

(3) R. Syme, *The Roman Revolution* (Oxford, 1939), id., 'Livy and Augustus', *HSCP*(1959), 27-87.

(4) この文でリーウィウスが、アクティウムの海戦による内乱の終結を、完全に オクターウィアヌス の業績とは考えていないことは、'di dede-runt' という記述からわかる。これは、リーウィウスの宗教心の表われとも理解できるが、アウグストゥスへの反発の慎え目な表現とも解釈できよう。

(5) R. Syme, 'Livy and Augustus' , HSCP(1959), 37.

(6) J. Bayet[Budé], Tite-Live, Tome I, 17ff.

(7) M. L. W. Laistner, op. cit., 77.

(8) XXX I, 1, 1-5.

(9) P. G. Walsh, Livy, His Historical Aims and Methods (Cambridge, 1961), 5ff. R. Syme 'Livy and Augustus' , HSCP(1959), 50.

(10) cf. H. Haffter, Rom and römische Ideologie bei Livius (1964), in: Wege zu Livius, hrsg. von E. Burck (Darmstadt, 1977)では, 第1巻に関する全般的な考察がなされている。

(11) Tac. Ann. IV, 34.

(12) Tac. Ann. I, 1.

(13) L. R. Taylor, 'Livy and the name Augustus' , CR(1918), 158-161. cf. K. Scott, 'Identification of Augustus with Romulus' , TAPA (1925), 82ff.

(14) cf. R. M. A. Ogilvie, A Commentary on Livy Books 1-5 (Oxford, 1965), 84ff.

(15) cf. L. Alfonsi, La figura di Romolo all'inizio delle Storie di Livio, in: Livius, Festschrift für Erich Burck zum 80. Geburtstag, hrsg. von E. Lefèvre(München, 1983).

(16) G. Stübler, Die Religiosität des Livius (Stuttgart-Berlin, 1941).

(17) W. Liebeschuetz, 'The Religious Position of Livy's History' , JRS(1967), 45ff.

(18) Tac. Ann. XIV, 1ff.

- (19) H. Petersen, op. cit.
- (20) V, 51ff.
- (21) H. Petersen, op. cit.
- (22) E. Burck, Die Erzählungskunst des T. Livius (Berlin-Zürich, 1964).
- (23) ibid.
- (24) R. Jumeau, 'Tite-Live et l'historiographie hellénistique' , REA(1936), 63-68.
- (25) R. Syme, op. cit.
- (26) R. Syme, 'Livy and Augustus' , HSCP(1959), 53
- (27) P. G. Walsh, Livy, Greece & Rome New Surveys in the Classics No. 8 (Oxford, 1974), 5.